

----- † ----- † ----- † ----- † ----- † ----- † ----- † -----

## CLIMAX PHASE

### Climax 01 “無垢なる大罪”の覚醒

Scene Player 花島田 英達

GM：……まあ、皆様<sup>ウスウス</sup>薄々 と言うかばっちりお気づきの通り、現実空間です（笑）

譲：（しれっと）あれ、そうなの？

GM：シナリオのかなり最初でネタがバレてたよ “リアル鬼ごっこ”（笑）

やっぱりお前が言い出したんだ、譲。……例によって例のごとく、すっかり忘れていたようだが。

譲：（しばらく沈黙した後で）……フッ、やっぱり私の緑色の脳細胞は素晴らしい。

悦<sup>えつ</sup>に入ってる人はさておき 要するに“見えざる神の手”の立てた計画“Project Judgement”とは、事前に瀕死状態の実験体に植え付けたレネゲイドを「ゲームの設定」と称して発症させ、「ゲーム内の必殺技」と騙しながら、現実の空間で殺戮<sup>たまた</sup>を行わせる というものだったのである。

GM：最初に「放棄されたビルが沢山あって……」って言ったよね？ そして“Project Judgement”の舞台は廃ビル（笑）。ポッドで眠らせた後、廃ビルに放置してさっきのシーン……というわけ。

じゃ、クライマックスに入るぞ？ 英達以外は好きなタイミングで登場してくれたまえ。

\* \* \*

GM：で、英達は廃ビルをたかたかと走ってるわけだ。……たかたか、じゃないだろうけど（笑）

英達：……しゅたしゅた！

擬音<sup>ぎ おん</sup>が変わっても緊張感が上がった気がしないのは、気のせいだろうか？

GM：いろんなところから轟音<sup>ごうおん</sup>が聞こえるけれども、その中でもひとときわ激しい音があるねえ。

英達：ちょ、ちょっとそっちを見に行ってみる。

不意に視線を上げた先で、宙に浮いた“彼女”の華奢な脚がヒュン、と空を薙ぐのが見えた。羽が舞うかのような、鮮やかな回し蹴り。それに反応して、血の滴る<sup>したた</sup>剣を振りかぶる少年。

次の瞬間。少年が踵<sup>かかと</sup>を喰らった胸元をぐしゃり、と陥没<sup>かんぼつ</sup>させて柱に叩きつけられていた。灰色の柱にひびが走ると同時に、手に握られていた剣が形を失い、床に跳ねて血だまりを作る。

英達は、はっきりと見たのだ。彼の“日常の象徴”が、“非日常”に侵<sup>おか</sup>されてしまったのを

---

“Project Judgement” 無論、これはただの余興でやるには規模の大き過ぎる計画である。この計画は「ただ殺戮をさせる」ことが目的ではない。……その真相は先を読むにつれ、分かるだろう。

GM：綾華は笑いながら「よーっし、四人抜き　このまま優勝目指すぞっ」と言っています。

桐子：……何あんにも気付いてなあ　いっ！（爆笑）

GM：もちろんですよ（笑）。だって、彼女は仮想現実だと思ってるんですから。

桐子：（虚ろに笑っている）あは、あはは……はあ。

英達：それじゃ、向こうが攻撃してくるよりも先に「咲島、無事が　っ！」と話しかけます。

GM：「もちろん！　ホラ、この通り勝ってるよ　」ばかーん、とした眼をしています（笑）。

英達：（切羽詰まった形相で）「……怪我はッ!?」

GM：「まだまだピンピンしてるわよ？　ゲージ満タンっ!!」（一同笑）

譲：さ、いくわよ～って感じだよなあ。もう、闘志剥き出して襲い掛かってくるわけだ（苦笑）。

桐子：うん、四人抜きだしなあ……（苦笑）。

GM：駆け寄ってくる英達を見て「そんな隙<sup>スキ</sup>だらけで近付いてきちゃっていいのお？」と。

英達：超～心配そうな顔してますよ（笑）。

GM：「ちょ、ちょっとちょっと英ちゃ～ん？　大丈夫う？」

英達：横まで来て（息を切らした様子で）「はーっ、はー……ッ、　無事なんだな!?」ともう一回。

GM：「うん、無事だけど。……何で？」

英達：「とりあえず行こう！」と言って、手を取って走り出します。

GM：（ずりずりと引きずられつつ）「え、何？　どこどこ、どっか違うトコ行って決闘<sup>けっとう</sup>すんの？」

英達：……と、とりあえずそう思わせておいてもいいから、走ります！（笑）

GM：どこまで走るのかな？

英達：な……っ、な、なんか……っ、何か、ない？　こっちが明るい、とか階段がありそう、とか。

GM：階段ならあるよ、廃ビルだしね。じゃ、上の階に行くと。

とりあえず腰を落ち着けた階段の踊り場で、英達は頭を抱えていた。

「こんなにリアルな世界なのに、ぶち壊すようなこと言っちゃダメだよお、英ちゃ～ん」

……その、こんな“現実”<sup>リアル</sup>で綾華と戦いたくなどないのに、すっかり“仮想”<sup>ゲーム</sup>だと信じ込んでいた彼女はそう言って聞かないのだ。ことごとく空振りに終わった説得に英達はため息をついた。

仕方ない……か。これだけは、咲島に見せたくなかったのに、な。

心の中だけで呟いて覚悟を決めると、右手を異形に変えて左腕を裂く。ぬるりと血が流れた。

「なあ、咲島……俺のこの血がニセモノだって　お前、ホントに言えるのか……？」

<sup>つら</sup>辛そうに顔をゆがめ、必死に問いかけてくる英達を見て、綾華の眼が初めて小さく揺らいた。

GM：「でも、さっき倒した人だって、血……出たよ？　手の形とか変わってた人もいたし」

譲：さっきも血しびき出てたしな。ゲームの演出だと思ってるんだろう。

英達：うううん～……ど、どう説明したもんかなあ　っ。

GM：あなたが持っている情報で説得をすることはかなり、難しいよ？（苦笑）

---

あなたが持っている情報で～　英達を持っている情報はかなり限定的なものであり、DX2ndの基本設定に近い部分でしかない。この“ゲーム”が“陰謀”であることを結びつける状況証拠（齋木病院と渋谷修治の関わり etc.）を持っているのは全て他三人のPCである。GMはこの一言で単独での説得の困難さを告げ、他PCに加勢を促した……つもりだったのだが、伝わっていなかったようである。

譲：(進展のない状況を見て).....そろそろ出るか。ビルの窓の外からギャギャギャ.....ッ！ という車のブレーキ音が聞こえてですね。「花島田君！」とかいう私の声が聞こえるわけだ。

桐子：じゃ、「綾華ちゃんっ、英ちゃんっ、無事　!？」って声も聞こえます(笑)

英達：最初の声が出た時点で、更にウルサイのが来やがったという顔でげんなりします(一同笑)

桐子：あたし、《シールドクリエイト》ででっかい斧を創ってます。その方が分かりやすいだろうし。

譲：(何故か拡声器で降伏勧告をするような調子で).....どこにいるんだあ、花島田君！

英達：.....ええ.....逃げたい衝動に駆られます(一同苦笑)

GM：衝動判定、する?(笑)

英達：え、する!?(一同爆笑)

使い方が違います。

譲：(ビル前で)花島田くうん、無事なのか　!？ 返事がないが.....このビルかっ！ 入るぞ!!

桐子：(同じくビル前で)綾ちゃん、どこ　っ!？

英達：じゃあ、彼らが捜してる間に咲島さんの方に向かって言う。

「.....俺は前から知ってたよ。　これが、“現実”だって」

自分がこの非日常の“現実”に属してしまっていることを、彼女だけには、知られなくなかった。

声に滲みそうになる自嘲を押し殺し、やたら騒がしくなった階下を振り返って再び口を開く。

「なあ、ヴァーチャルの世界にさあ.....俺らの知り合いがいきなり入ってくると思うか.....？」

そのとき、英達は失念していたのだ。

綾華の手が、既に四人の血に濡れていることを。

“これがゲームでないこと”を彼女が認めるということが、彼女に何をもちたらすかということ。

英達：.....反応は？

GM：う　、ん.....段々と分かってきてはいるようだけど、目を背けている感じかな。

英達：(ため息をついて)そっか.....四人抜きしちゃったんだっけ。

桐子：.....説得間違えると、一気に何か.....あの、ジャーム化しちゃうしそうな気がしますよ?(焦)

\* \* \*

英達が踊り場で苦戦している頃　階下には。

ひとりで説得をしようと試みる英達の意を汲んで、大搜索で時間を稼ぐ譲の姿があった。

譲：確か.....一階には死体が転がってるんだよな。(ざーとらしく驚いて)何だ、これはッ.....！

桐子：何だこれわじゃないよ!!?(爆笑)

譲：.....ええいつ、彼らは犠牲者かッ！ 花島田君たちは無事か!？ どこなんだ!？ .....フッ、そうかッ！ 気配は上からしている！ 私の緑色の脳細胞は間違いなくそうだと告げているッ！

英達：堪えきれずに「お前はフツーに来れんのか　ッ!!」と階段の方に叫びます(苦笑)

---

《シールドクリエイト》 物質変換によって盾を創り出すモルフェウスのエフェクト。盾の形状は自由だが、桐子の場合は斧型にしている。.....ということで桐子の巨大な斧に殺傷能力はない。

譲： 聞こえた！ やはり私の緑色の脳細胞に間違いは（略）。

桐子：アンタ、カビてるでしょその脳細胞っ!? と斧をブンブン振り回しながら登場（笑）。

譲：それから必死に逃げつつ「助けに来たぞ花島田君！」と言って登場。

GM：むしろ助けて!! みたいな（笑）。

.....クライマックスなのにギャグにしてどーする。

英達：やっぱりげんなりした顔でこう.....階段の方に向かってはあああ~って（深くため息をつく）。

GM：綾華は後ろから桐子ねえの聲が聞こえたので「え？ えっ、えっ？」という風に、自分の手を見つめながら「だって だって、じゃあ、今までの.....」と眼も虚ろに呟いています。で、上の方から「フフフ.....楽しんでいるようだね、皆さん」という男の聲が聞こえてきますね。

譲：（無駄に渋く格好良い声で）.....ようやくお出ましか、“見えざる神の手”。

「し.....渋谷さんっ！ 嘘でしょ.....嘘なんでしょ？ これ、ゲームなんですよっ、ねっ？」

“ゲームの責任者”に救いを求めて駆け寄ろうとする綾華を、とっさに腕を掴んで引き止める。

譲から事前にFH エージェント“見えざる神の手”の名を聞いていた、ということもあるが。

実際に英達を突き動かしたのは 今、綾華をそばから離してはいけない、という直感だった。

英達：咲島さんを抑えながら、渋谷さんの方を向いて黙って睨みます。

GM：彼は一歩一歩降りてきながら、爽やかに微笑んでいますね。（薄く笑って）「いいえ？」

英達：（プレイヤーの素に戻って）写真で見ると爽やかだけど、今見ると胡散臭いっ（一同笑）

「いいえ？ これは夢でも、ましてやゲームなんかでもない」

笑みを刻んだ口許がそこまで語ったところで、不意に“渋谷修治”の姿形がグニャリと歪む。

「.....紛れもない現実よ、“イノセント05”咲島綾華さん いいえ、私の“無垢なる大罪”

艶やかに笑いかけられる二人のやや後ろで、秀真が小さく目白香奈恵 と呟くのが聞こえた。

譲：（こそつと）.....なあ、私ら今のうちに部屋の方に逃げてってもいい？（笑）

GM：逃げるのかよっ（笑）。

英達：君ら、エンゲージしてるとマズいもんね（笑）。

それは分かるが.....「距離をとる」とか他に色々言い方はあるだろうに。

桐子：あたしは英ちゃんのそばにいます。

譲：上から来る“見えざる神の手”の歩調に合わせて、ゆっくり部屋の中に入っていこう。

GM：綾華に近付いて来ているから、ゆっくりと英達の目の前まで来るよ。

英達：目の前まで来るの!? 彼女を背後にかばう！

GM：なら、そこで立ち止まる。綾華はあなたの後ろで虚ろな目をしているよ。

英達：（切羽詰まった声で）あああつ.....、やめてっ、止めてええ.....っ。

「う.....そ.....嘘.....っ！」幼い子がいやいやをするようにうつむいて首を振り続ける綾華。

“見えざる神の手”が声を張り上げる。「あなたは！ 四人もの“人間”を！ “殺した”ッ!!」

譲：<sup>ストップ</sup> Stop！ それ以上喋るな、“見えざる神の手”！！

GM：「……そこで私が止まると思って？」

譲：止めてみせようではないか。………その、“熊”、が（一同爆笑）

GM：メッチャ他人頼りだ っ！（笑）

譲：だ、だってえっ！（笑） ……な、ならば「止めてみせよう！ 我々の力で!!」

GM：ま、そんなことを言っているとですね……今の「人間を殺した」が綾華の衝動判定に繋がるキーワードです。自分が殺人者だと分かって、絶叫が後ろから響くよ！

英達：じゃあそっちの方を向いて「綾華ッ!!」って言いながら抱き締めます。

譲：（後ろの方でじったんばったんしている）ひあ ああ～。

GM：ふむ、抱き締めたんなら見えるかな。彼女の眼は、血のような<sup>あか</sup>赫い色をしています。

譲：じゃああああ むっ！ ……いや、<sup>まじょう</sup>魔性だ！

ゲームが違います。

GM：真っ赤な眼から血の涙を流して、あなたにだけ聞こえるくらいの小さな声で呟いています。

綾華の、夢を見ているように焦点のぼけた<sup>ささや</sup>赫い瞳。囁きが病的な叫びに変わっていく。  
「コロすの殺すコロスコロす……あははっ、殺すの楽しいんだよ、英ちゃん？ あはは、あははっ！」

英達：さ、咲島さんも[衝動：殺戮]ですか……（苦笑）

「前から……英ちゃんのこと気になってたの。私 あなたのことにずっと殺したかったの!!」  
強く抱き締めた腕の中で、<sup>ゼロきより</sup>零距离から拳が動くのを知覚しながらも 英達は反応出来なかった。

英達：うわあああん（涙）

……呼び方変えたけど、スルーされた（苦笑）

GM：……うむ、（GM は）気付いていたよ（笑）。  
それじゃあ、戦闘前にエンゲージ整理を。綾華、英達、“見えざる神の手”……がひとつ。他は？

桐子：[受け]が出来て、かばえるぐらいは近寄りた  
いので、あたしもそのエンゲージにいます。

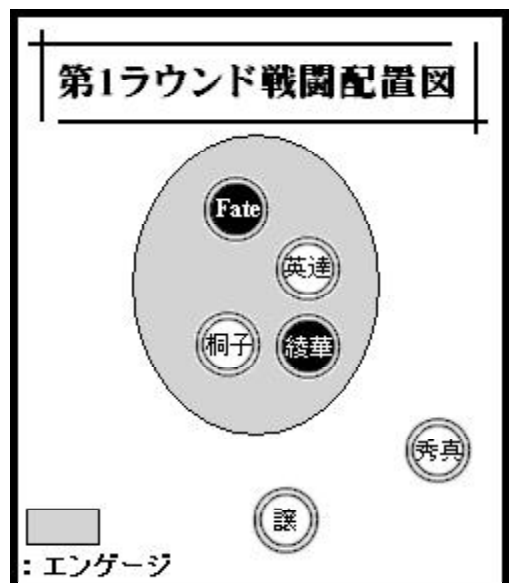
譲：私たち二人は後方に、別々のエンゲージで。

GM：了解。それじゃ始めようか。

まず、残りの三人は衝動判定してね。

メンバー随一の肉派・英達よりははるかに【精神】に長ける三人は軽々と衝動判定をクリア。

<sup>のきな</sup>軒並み<sup>かくじん</sup>侵食率が高まったことからの各人の悲鳴を  
BGMに第1ラウンドが始まった。



綾華の衝動判定 もちろん実際には行ってないし、彼女はシナリオの進行上確実に一度ジャーム化する。衝動は特に決めていなかったが、台詞と合うので英達の発言を拾って[衝動：殺戮]とした。

魔性 平野和盛氏がデザインしたTRPGシステム『異能使』におけるPCの敵の一部の名称。

## 第1ラウンド

GM：あ、言い忘れてたけど“見えざる神の手”はエキストラなんで、実質敵は一体ね。

譲：しかし、彼女……ぜ、全力でぶっ倒してもよいものなのか……？

GM：ああ、[昏倒]後すぐにUGNの処置班に任せれば、ジャーム化から引き戻すことが出来ます。

譲：(ざーとらしい口調で)……出来るかも知れない！ UGNは偉大だ、万能なのだっ！

秀真：(はるか後方から)ゆうじいえぬのがくりよくはせかいいいい～。

……だから何故クライマックスをギャグにするのかと。

GM：というわけで、手は抜かなくてOKです。[とどめを刺す]さえしなければね(笑)。

英達：むしろ、そいつを攻撃するよ(笑)。(冷たい声で)「……そうか、お前は死にたいか」

秀真・譲・桐子：お、おおお……オッケイ(怖)。

\* \* \*

秀真の手の一振り<sup>エンジェリック・シン</sup>で譲がその場の全員から距離<sup>あ</sup>を空け、桐子が三人の方に向かって床を蹴る。  
“無垢なる大罪” 咲島綾華より一瞬だけ早く動いた秀真は、迷わず引き金を引いた。

秀真：いつものコンボでぶっ放すぞ。いっけえ！(ダイスを振る)……駄目だ、ものっ凄い悪い。

GM：(ザラザラとダイスを振る)うん、クリティカルして[受け]成功。さ、ダメージ来い！

秀真：(ダイスを振る)えーと、23点だな。

斜め背後<sup>ちゆうちよ</sup>から躊躇なく撃ったのは、綾華が英達<sup>うず</sup>に拳を埋めようとする動作を悟ったからだ。

しかし、疾風<sup>かせ</sup>のように飛んだ弾丸は彼女の前で急に失速<sup>しつそく</sup>し、その腕を軽くかする程度に終わる。

GM：受け止めて……ちょっとダメージがきた。今度はこっちの行動ですね。マイナーアクションで《異世界の因子》を《早業》相当で使って《暗黒の衣》+《爪剣》。

譲：うお、パロール/エグザイルか。

GM：綾華の細身に重圧がまとわりつく感じです。身体強化に重力を使うから、エグザイルだけけど変形しないんですよ。ほら、ヒロインだし！(笑) メジャーアクションは零距离パンチね(笑)。

桐子：って、避けようがないじゃん！(驚愕)

GM：あ、大丈夫。規則的には何の状態でもないから、[避け]ていいよ(笑)。

譲：殴られそうになって振り払う、とかそんな感じだろう。

---

せかいいいい～ 原典は『ジョーの奇妙な冒険』(集英社)第二部で、サイボーグとなった某国軍人が叫んだ名言。……まあ、確かにUGNに置き換えてもあながち間違いではないと思われる。

《異世界の因子》 エグザイル以外のシンドロームのエフェクトをコピーし、一時的に使えるようにするエグザイルのエフェクト。ただし、事前に目の前でそれが使われるのを見る必要がある。

《早業》 目にも留まらぬ速さで戦いの準備を整えるハヌマーンのエフェクト。

《暗黒の衣》 重力で創った力場を鎧の代わりにして身を護るパロールのエフェクト。

《爪剣》 爪を伸ばし、硬化化させることによって武器とするエグザイルのエフェクト。

GM：うん、そんな感じだね。<sup>しっこく</sup>《漆黒の拳》+《魔王の理》+《闇の鎖》で、そちらにダイスペナルティが3個かかる。(ザラザラとダイスを振る) 四回クリティカルして45と言って攻撃(苦笑)。  
桐子：(GMと英達がダイスを振る様を見ながら).....何かじゃらんじゃらん音がしますなあ。  
譲：.....まあ、ボスだしね。  
英達：(出目を見て)うう、これでも頑張ったんだよう！.....達成値22(涙)。  
桐子：じゃ、エフェクト使わずに[カバリング]します。《シールドクリエイト》って有効だよな？  
GM：有効だけど.....防御点だから、まず目標値41で[受け]を試みてくださいな。  
桐子：.....とりあえずやるだけやってみます。(ダイスを振る).....う、達成値15でストップ。  
GM：じゃ、ダメージ出すね。(ザラザラとダイスを振る)ばすうっと一発、26点。  
桐子：HPが0になるんで《リザレクト》しまあす。(ダイスを振って).....6点になった。

斧で受けている余裕はなかった。考える暇もなく、桐子が強引に二人の間に割って入る。  
小柄な身体が「く」の字に折れ曲がるほどの激しい衝撃に、くぐもった呻き<sup>うめ</sup>がこぼれ出た。

桐子：死んで生き返りました！(笑) あたしはこれで[行動済み]。  
譲：私か。まずボスに《茨の輪》+《苦痛の矢》+《絶対の空間》で(ダイスを振る)達成値40。  
GM：ダメージないんじゃない[受け]でも無意味だし、[避け]か(ダイスを振る).....無理。

<sup>しゅじゅ エフェクト</sup>  
種々の化学物質で綾華を弱体化した譲は《ふたつめの牙》を使い、セカンドアクションを宣言。  
《熱狂》+《狂戦士》+《絶対の空間》を使って、英達の【肉体】に驚異的な強化<sup>ほどこ</sup>を施した。

譲：もう、ボス並みの破壊力に(笑)。

英達：《破壊の爪》は創ったままなんで.....マイナーアクションで《ハンティングスタイル》+《完全獣化》+《氷の加護》、メジャーアクションで《フルパワーアタック》+《業炎》を使いまあす。  
GM：[受け]まあす。ガチで殴り合おうぜ(笑)。  
英達：【肉体】6に今増やしてもらった11個、《戦術》の1個、侵食率で5個.....と《完全獣化》で6個.....**ダイス足んない！(爆笑)** (手に乗りきらないので)一回じゃ振れません(笑)。  
譲：もう30個近くだしな(苦笑)。  
英達：クリティカル値は6です(ざらざらっとダイスを振る)。

手元だけでは到底振りきれない個数なので、豪快にテーブル一面を使うことになった。  
まず10個ずつ程度に分けて振り、クリティカルしたものをプレイヤー四人がかりで選別していく。  
約二分間にも及ぶダイスロールの後、英達が叩き出した達成値は何と

---

《漆黒の拳》 重力の塊を、自らの手で直接的に叩きつけて攻撃するパロールのエフェクト。  
《闇の鎖》 重力の方向を調節して相手の回避行動を妨げるパロールのエフェクト。  
これでも頑張った 英達は[避け]時クリティカル値の下降手段がないため、達成値が伸びにくい。  
《茨の輪》 痛覚を刺激する化学物質を精製して相手に塗布するソラリスのエフェクト。  
《苦痛の矢》 痛覚を直接操作して激痛を与え、相手の集中を乱すソラリスのエフェクト。  
《絶対の空間》 領域に己のレネゲイドを放出し、より精密に力を制御するオルクスのエフェクト。  
《ふたつめの牙》 領域を操ることにより、一挙動の時間で二度動くオルクスのエフェクト。  
《熱狂》 特殊な物質で理性を狂わせ、暴走させることで肉体を強化するソラリスのエフェクト。  
《狂戦士》 強力な興奮物質を散布することで、相手の力をさらに引き出すソラリスのエフェクト。  
《フルパワーアタック》 大仰な構えからの一撃で大ダメージを与えるキュマイラのエフェクト。

一同：50 ..... 60 ..... 70 ..... 80 ..... !

英達：(ダイスを振って) 83 .....に 白兵 4レベルだから、**達成値 87 !!**

GM：こっちは19で止まったから、[受け]に失敗してる。

譲：頑張れ、一撃で薙ぎ倒せ！ (英達の出目を見て) .....って全然ダメだ！ (笑)

英達：えーと..... 44かな。**それに、プラス33 (笑)**

**恐るべし、完全戦闘形態のキュマイラ。並みのオーヴァードなら追加分だけでジ・エンドである。**

GM：77点か。.....重い手応えだと思いましたが、それほど効いた様子はありません。《<sup>とうか</sup>透過》を使用、エネルギーを受け流してこちらのHPを回復しつつ、[昏倒]状態から回復します。

譲：.....なるほど、エグザイルだしな。

GM：[昏倒]したので《茨の輪》は解除、クリンナップで受けるはずだった実ダメージはなしです。

## 第2ラウンド

セットアッププロセスでの定番となった秀真の《戦術》から、第2ラウンドもスタートした。

秀真：とにかく撃つぞ。達成値40ぐらい出てくれっ(ダイスを振る).....いかねえな、28(苦笑)

GM：(ダイスを振る)こっちは26 あ、《爪剣》出した分で29だ！ギリギリで[受け]成功。

桐子：(横から秀真のダメージダイスを見て)お、高い高い！

秀真：攻撃力足して 35点ダメージ。

**かなりのダメージだが 綾華が二重に張り巡らせた重力場<sup>はば</sup>に阻まれ、通ったのはわずかに2点。同タイミングで綾華は《<sup>まがん</sup>ダークマター》を使用、魔眼をあらわにして再び腕を振り上げた。**

GM：さっきのコンボ+《ジャイアントグロウス》+《ライトスピード》扱いの《異世界の因子》で、英達と桐子に薙ぎ払い。(ダイスを振る).....う、出目が腐ってきたな(涙)。達成値39。

桐子：(英達が[避け]に失敗するのを見て)一回目は普通に[カバーリング]するね。

GM：ま、すばーんと胸、ぶち割られてくれ(笑)。.....ってこれ、凄いセクハラゾーンだ(苦笑)。

<sup>きょうこつ</sup>**胸骨がめきめき言ったり胴体貫通する時点で、セクハラとかいう前にただのスプラッタだろう。**

GM：.....一撃目終わって、二撃目いきまーす。(ダイスを振る).....ちょっと上がって49。

桐子：《<sup>けっかい</sup>砂の結界》使って[カバーリング]しまあす~。HP3点しかないし、(爽やかに)ダメージ振るまでもなく死ぬたる！(笑) 《リザレ~クト》お~ (ダイスを振る)HP7あっ！

英達：(目を剥いて)まだ《リザレクト》出来たんだーっ!?

GM：そりゃ、全然エフェクト使ってないし。一発で10以上侵食率が増える人とは違うわい(苦笑)。

---

**《透過》** 肉体を液化化させて攻撃を透過させ、そのエネルギーを吸収するエグザイルのエフェクト。

**《ダークマター》** 魔眼と呼ばれる球体に意識を集中し、さらなる力を操るパロールのエフェクト。

**《ジャイアントグロウス》** 肉体の一部を巨大化させ、広範囲に攻撃するエグザイルのエフェクト。

**《ライトスピード》** 光速の速さで連続攻撃を仕掛けるハヌマーンのエフェクト。

**《砂の結界》** 物質錬成に使う砂を操って相手をかばうモルフェウスのエフェクト。

英達：あ、でも《完全獣化》終わったし！（嬉しそうに）次の行動からは**8しか**上がらない！（笑）

既に140%を超えている人がさらに一撃で8ずつ上がったら、普通に危険領域だと思います……。

譲：じゃあ、次で最後の一撃にしてくださいよ？ まずは《苦痛の矢》+《絶対の空間》を。

秀真：（大泣きうしゃぎ人形を眺めながら、ぼそり）ああ……綾華さん、こんな姿になっちゃって。

違います。ていうかそれじゃ思いっきり弱くなってるし。

GM：達成値37？（ダイスを振って）……当たってる。ダメージはないんだっけ？

譲：私は相手にダメージを与えるエフェクトは一切持っていませんよ。強いて言うなら《茨の輪》。

GM：……**じ、時間かかるなオイ**（笑）。ホントに“熊”がいないと戦えないねえ。

\* \* \*

譲が少し意識を集中すれば、そこは製薬工場になる。人の力を引き出すも妨げるも思いのままだ。  
「花島田君 次で最後の一撃にするんだよ？」そう声をかけ、前方に指先を向ける。  
綾華の肩越しに、英達であった“獣”がこくり、と頷いて腕を引き、腰を落とすのが見えた。

英達：マイナーアクションで《氷の加護》使ってから、《フルパワーアタック》+《業炎》です。

秀真：決める！

桐子：行ってらっしゃい。……怪我するんじゃないわよ？

譲：頼むよ、私の“祝福”を無駄にしないでくれたまえ。（嬉しそうに）行くのだ“熊”よ！（笑）

英達：（計算中）タイタスでダイスをもう10個振 クリティカル値も下げるかあ！（笑） 渋谷さんと“Project Judgement”のタイタスを昇華しょうか。これでダイス39個、クリティカル値5！！

GM：じゃ、何かイイ演出をお願い（笑）

英達：分かった。じゃあ……（しばし考え中）……ええと。

“せっかく咲島が誘ってくれたのに……。

“見えざる神の手”、お前のせいでこんなことになってしまった。

絶対に、咲島だけは失わない ジャーム化なんて、させやしない！”

譲：（間髪入れず）行け！ 私の仙台熊太郎への想いを込めて、いざっ！（笑） 必殺のおっ！！

せっかく英達P.Cが頑張ったのに、そのまま格好良く決めさせてあげようという思いやりは（略）

英達：……く、くすんくすん……（しくしくと泣いている）

GM：くるっ、て振り返って譲に叩きつけられそうですね（爆笑） 必殺の一撃（笑）

英達：やりたいっ。凄くやりたいっ（笑）

……眼が笑ってませんか？

---

うしゃぎ イラストレーターのみかきみか氏が創ったウサギのようなキャラクター。好物は肉まん。

英達：(再びプレイヤー四人の共同作業中)..... 50 ..... 70 ..... 90 ..... 104。達成値は108っ！  
GM：おお.....ケイトのような一撃だな(笑)。こっちの達成値は34だから、[受け]切れない。  
英達：(ダメージダイスをざらざらっと振る)57 + 33で、90点！

“獣”の爪が、一直線に綾華の腹部へ向かう。それを察知して、重力波を放とうとする綾華。  
“咲島ごめん.....絶対もとに戻してやるからな.....!!”  
永遠のような一瞬が過ぎて　どんっ！　という生々しい音と共に、時間の流れが元に戻った。

英達：凄おい悲しそうな顔をしてそう言いながら　《フルパワーアタック》(一同大爆笑)

自分でオチをつけるなよ。せっかく譲が放<sup>は</sup>つといてくれてたのに。

GM：言うな！　ぶち壊しだからっ！(笑)

譲：(英達の真似をしてパンチ)咲島ごめん、絶対に戻してやるから.....なあああぁッ!!(一応笑)

GM：.....拳なら吹っ飛ばさるうと思っただけど、爪が出てるしなあ。ざくうっと貫かれる感じだね。

英達：とりあえず、あの、女の子なんで.....顔はやめて、ボディで.....(一同笑)

.....女の子に腹パンチも、相当マズい気がします。まあいいや、終了後の演出始めようっと。

\*                     \*                     \*

「　もしもし、帆島です。八名死亡、一名確保、一名要保護.....ええ、至急、応援を.....」  
支部への連絡を終えて譲は頭上を振り仰いだ。いつの間にか、夜が明けたようだ。  
光に眼を細めながら、室内に視線を落とし.....思わず笑いそうになった。

既に死亡した“見えざる神の手”　おそらく本体ではないのだろうが　を捕縛<sup>ほぼく</sup>している秀真。  
桐子<sup>しんちゆう</sup>の方はもっと分かりやすく、何が言いたげな目でチラチラとそちらを見ている。  
その心中を察するに.....心配<sup>しんぱい</sup>はしているが、そこに入っていけない　といったところだ。  
ま、そういう私も、悶絶<sup>もんぜつ</sup>したい気分とからかいたい気分が半々なんだがね.....。  
数瞬ののち　苦労してそのどちらにも目をつぶると、譲も秀真たちに倣<sup>なら</sup>うことにした。

英達の腕の中に綾華がとさつ、と倒れ込んできた。そっと爪を引き抜いて、獣化を解く。  
周囲にはもはや、何の音もない。真上から注ぐ光の中、彼女の瞳が黒く濡れているのが見えた。

「そんなに泣くな.....あやか」

頭を撫でながら昔呼んでいた名前を口にすると、ぼんやりとした眼で見返される。

「あはは.....っ。ホント.....もう.....これ、次.....眼が覚めたら.....夢だったらしいのにな.....」

あるかなしかの呟きに、何が弾けた。それがいたたまれなさなのか、巻き込んでしまった後ろめたさなのか、別のものなのか.....分からない。ただ、それに身を任せて綾華を抱き締めた。

「そうだよ、夢だよ、あやか　だから、寝な.....？」

やっぱ夢かも、英ちゃん優しいもん　などという失礼な言葉と同時に、綾華の眼が閉じた。